6. 研究協力者，共同研究者による研究活動と考察

6-1 山中久恵

研究協力者の一人である，声楽家・山中久恵氏には歌う立場からの考察をお願いした。インターネットや電話でのコンタクトだけではなく，何度か直接お会いして，研究の目的や意図を理解頂き，その考察をまとめて頂いた。ここに資料として掲載する。

「子守唄」についての考察

山中久恵

［1］ はじめに

日本に昔からある、脈々と歌いつがれてきた子守唄は、直接母親が子供に歌って寝かしつける、あるいはあやすための唄や、幼い女の子が貧しい農家の口減らしのために奉公に出され、辛い思いを唄にしたものなど、その背景にはさまざまなものがある。その研究については専門家に任せ、筆者は歌い手としての立場から「子守唄」について考察していきたい。

［2］ 子守唄を歌う

２－１　「子守唄をしっていますか。」と尋ねたら、まず最初に頭に浮かぶのが「坊やはよい子だ」であろう。

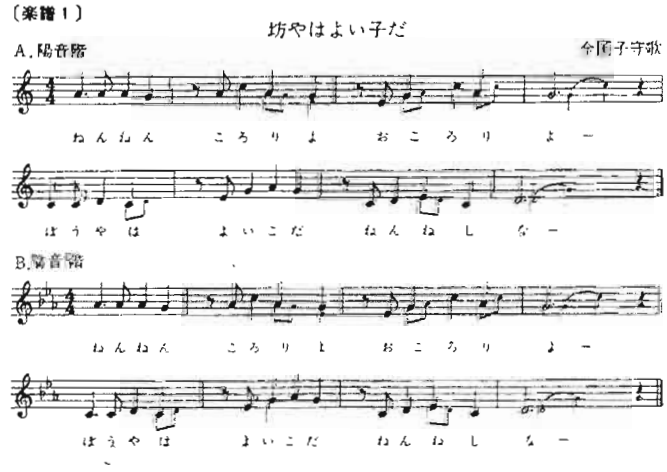
「子守と子守歌」
その民俗・音楽
右田 伊佐雄・著
東方出版
P152

坊やはよい子だ

〈ねんねんころりよ　おころりよ
　坊やはよい子だ　ねんねしな
〈坊やのお守は　どこへ行った
　あの山越えて　里へ行った
〈里の土産に　なにもろた
　でんでん太鼓に　しょうの笛
〈起き上がり小法師に　振り鼓
　たたいてやるから　ねんねしな
（または）ねんねんころりよ　おころりよ
　坊やはいい子だ　ねんねしな
　坊やの子守は　どこへ行った
　あの山越えて　里へ行った
　里のお土産に　なにもらった

「坊やはよい子だ」は全国都道府県の、ほとんどすべての地域で共通に歌われてきた、いわゆる全国子守唄である。ただし、各地方地域で、歌詞も旋律もかなり自由に歌っている。

「子守と子守歌」
その民俗・音楽
右田 伊佐雄・著
東方出版
P153



メロディーも大別して２通りある。Ａ・陽音階、Ｂ・陰音階とあり、どちらかといえば陰音階の方がよく歌われているようである。

歌い方であるが、「ねーんねん」の「ん」の処理の仕方が問題である。「ん」の響きが無くならないようにしなければならない。

「ねーん」と「ｅ」の母音で長くのばし、「ん」でしめず、すぐ次の「Ｎｅ」の母音に移行する。「ころりよ」は「ころ」の八分音符から４分音符へは、慌てていかないで、ゆったりと「Ｋｏ－Ｒｏ」と歌う。「ねんねんころりよ　おころりよ」最初この四小節をどう歌うかで、決まってしまうのである。

歌う側が「何を歌っているのか」という事を絶対に忘れてはならないのである。「子守唄」の「心」であって、「音符」ではない。

昔から歌いつがれてきた歌、その時代時代で、人の声も消えてゆく。今、生きている人が、この時代、この瞬間にこの曲を歌う時、そのはるかな時を経て、すべての子守の子の思いや、母親の思いをこの唄に込めて歌いたい、と思うのである。

２－２

お月さんなんぼ

お月さんなんぼ
十三　七つ
まだ年しゃ若い
若い子をうんで
誰かに抱かそ
お万に抱かそ
お万いやじゃ
お万いやなら
お菊に抱かそ
お菊さんも
いやじゃ
お菊いやなら
お花さんに
抱かそ

月を見て歌う尻取り形の子守歌で、伝承は古く、江戸時代初期にはすでに歌われていたとされ、全国的に少しずつ形を変えて広くうたわれている

キングレコードＣＤ
「よいこのどうよう　ベスト」より

図お月さまいくつ

お月さまいくつ　十三七つ
まだ年ゃ若いな
あの子を生んで　この子を生んで
だれにだかしょ　お万にだかしょ
お万どこへいった
油買いに　茶買いに
油屋のまえで　氷がはって
すべって　ころんで
油ーしょうこぼした
その油どうした

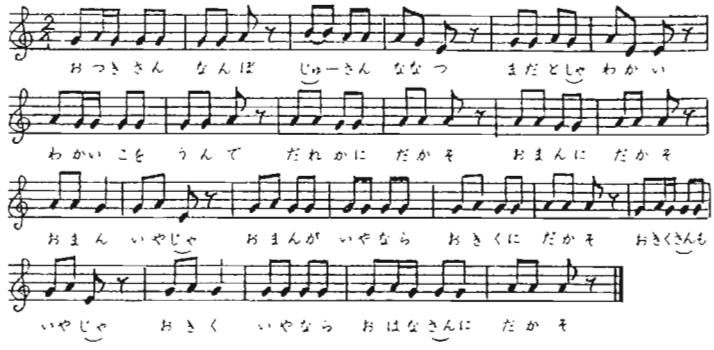
おっ月さまこさま　「愛知」

おっ月さまこさま　おまさんいくつ
十三七つ　お若いことよ　お馬に乗って
シャンコ　シャンコおいで

お月さんなんぼ　　「京都」

お月さんなんぼ　十三七つ　七色着せて
京の町へ出したなら　あちらへよろり
こちらへよろり　よろりの中で
櫛やこうがい落として　茶売り爺が捨て
泣いてもくれず　笑ろてもくれず　くれなくれな
愛宕の山から比叡の山まで　鳴子をかけて
取ってみしょ　取ってみしょ

お月さんなんぼ



この曲は音の幅が狭く、ｅ～ａまでの音域である。尻取り歌とあるように、歌うというより語りである。よって、まっすぐ素直な声で歌いたい。

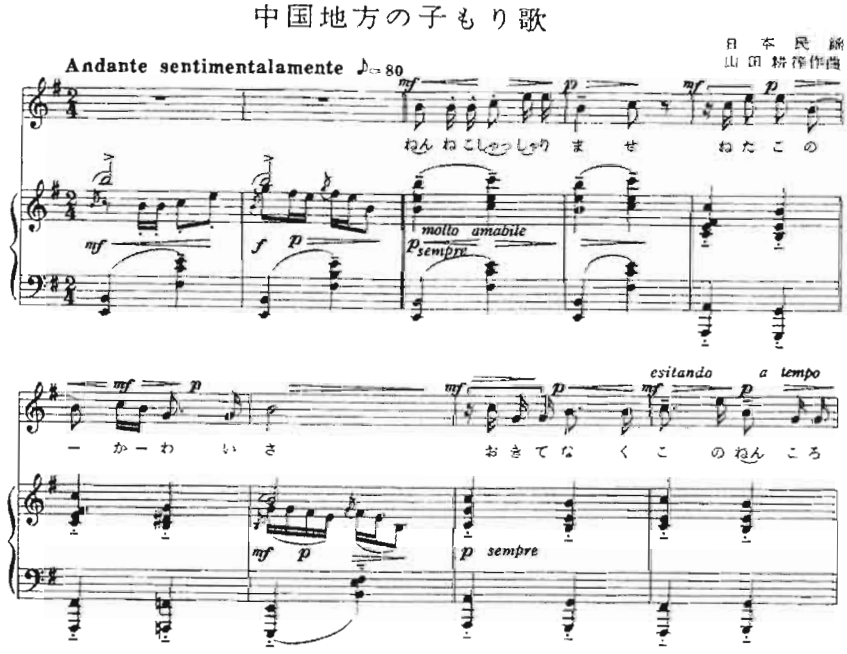
「日本の子守歌」
民俗的アプローチ
松永 伍一・著
紀伊国屋新書
Ｐ１

［３］ 芸術的歌曲としての子守唄

３－１［中国地方の子守歌］

歌い手としての筆者が「子守唄」と聞くとまっ先に頭に浮かぶのが、山田耕筰編曲の「中国地方の子守歌」である。

「女子音楽」女子高校・大学女子用副教材集
音楽之友社　Ｐ１２～Ｐ１３



「山耕節」とも言われる山田耕筰の歌曲は誰でも歌うが、きちんと歌うにはどれも難しく、歌い手の技量がわかってしまうものである。まずは楽譜に細かく書かれていることを忠実に表現する。「ねたこの」の「こ」Ｅの音、高くなるところでＰ（ピアノ弱く）にするというように、高音域に声を細く弱くもっていくテクニックの難しさがある。また、ＰＰ～ｍｆ、ｍｆ～Ｐなど細かい強弱をうまく表現できないといけない。

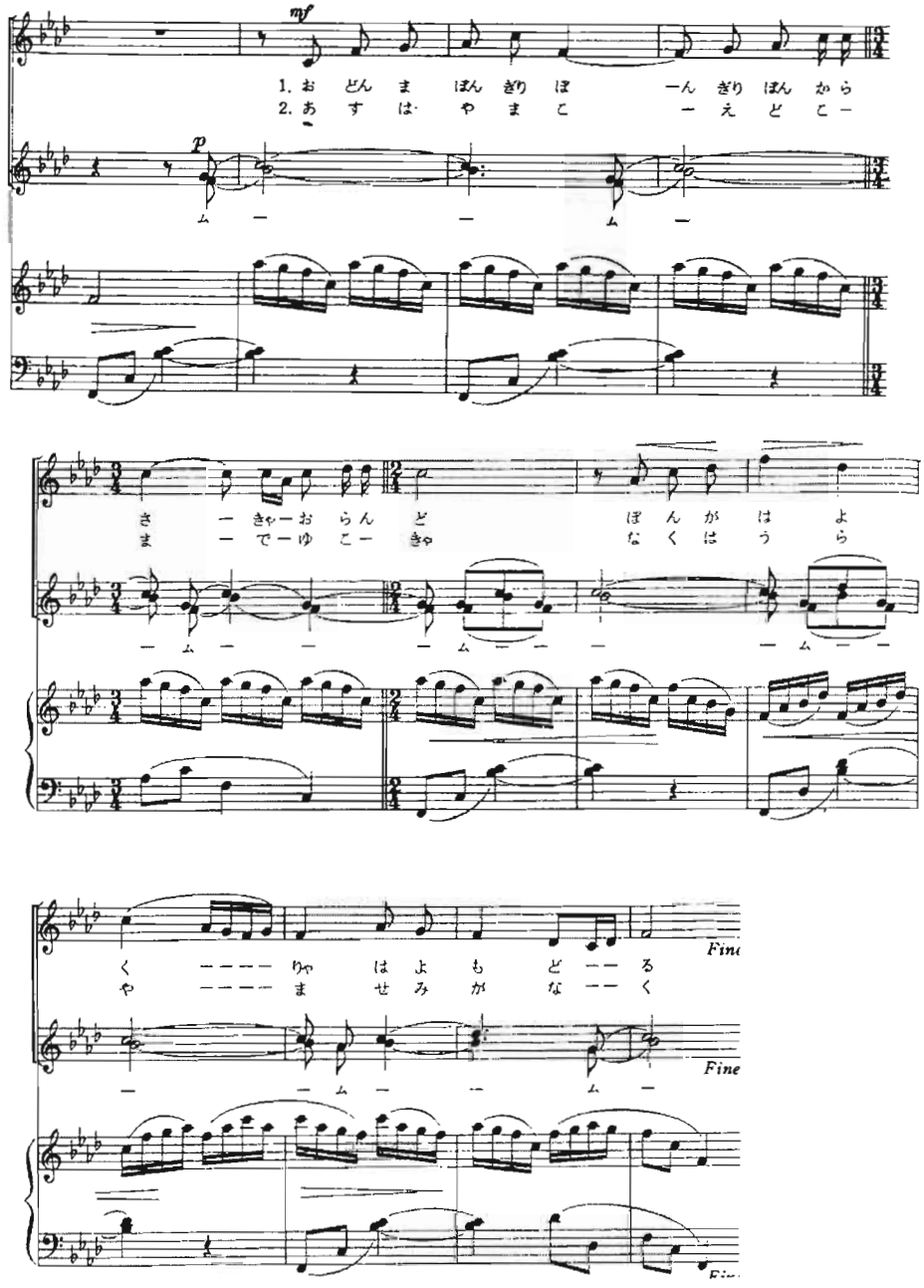
同様に細かい指示は、ピアノ伴奏にも求められ、この曲をひとたび演奏するとなると、相当の勉強をせねばならない。

３－２「五木の子守歌」

日本人の七割くらいが知っているであろうこの曲は、戦後急に有名になり、酒宴の席や、歌謡・民謡コンクールなど、あるいは喫茶店などでもよく聴かれたものである。しかし、平成の現在では、あまり耳にすることもなく、平成生まれの若い世代では、まったく知らない者もいるのではないだろうか。

「女子音楽」女子高校・大学女子用副教材集
音楽之友社　Ｐ８３～Ｐ８５

五木の子守歌　　熊本県民謡・森脇憲三 編曲



「おどまぼんぎり」「ぼんからさきゃ」と言葉の間をとる。「はよくーりゃ」の 16 分音符は急がず、ていねいに歌う。

そしてこの曲の最大の魅力は「ゆこきゃ」「うっちんちゅうて」などの方言である。

余談であるが、子供の頃、ゴミ収集車が、この「五木の子守歌」のメロディーを流しながらやってきた。そのもの哀しい旋律は、子供心に深くしみ入り、今でもこの曲を歌う時どこか懐かしく、何とも言えない魅力を感じるのである。

［4］ 歌い手として・音楽家として

演奏活動を続けている私が日々思うこと、それは歌は歌いつがれてゆかねばならないということである。多くの歌い手たちが、声を訓練し、勉強を重ね、本番ともなれば体調管理にピリピリしながら、人々の前で歌わせて頂いても、一人の歌い手が一生の間で歌う曲はほんのわずかでしかない。

外国のオペラやリートも素晴しいが、日本には日本人でしか歌えない、心の表現がある。その中でも「子守唄」は、女の哀しみや慈しみ、子守娘の辛さや恨みが、その単調なメロディーにこめられているのである。施設等で歌わせて頂く機会が度々あるが、長い人生を歩んでこられたご婦人方の、深いしわでクシャクシャになったお顔から、優しい笑みと、眼にはうっすらと涙がにじむのを、はっきりと認識するのである。

子が生まれ、新しい命が未来へつながれていくように、子守唄もまた歌いつがれ、人々の心につなげていかなければならないと強く思う。子が生まれてすぐに、他人に預け働いている母親が多い現在、（昔の子守娘は今は保育士さんであろうか）おんぶされて聞いた子守唄、だっこされて聞いた子守唄は、過去のことになってしまっただろうか。

子守唄について、今一度、皆が考えてみてもいいのかもしれない。

2012 年 2 月

筆者・養護学校にて

7. 研究のまとめ

7-1 共同研究者，研究協力者について

本研究は平成22年度，23年度の2年に亘り，本学共同研究の採択を受けて開始した研究活動である。筆者が以前から温めていたテーマであり，また多少なりとも本テーマに関わりのある活動も継続していたこともあって，非常な興味と期待を持って取り組んだ研究であった。共同研究者・研究協力者においても，個々の立場からの活発な活動がなされており，其々貴重な資料収集や考察が加えられている。以下共同・協力者の研究内容について掲載順に述べてみよう。

山中久恵氏は　声楽家としての立場から，子守唄をはじめとする楽曲の解釈や演奏解釈について述べるだけではなく，どのような心で歌うのかという，唄そのものや聴き手に対する歌う側の「心」の大切さを述べている。部分的に詳細な演奏上のコメントを交えながらも，歌うことにおいて最も大切なものは「心である」と述べている。これは声楽家としての実践活動を永年継続している人でなければ，そして真に歌を愛し人を愛していなければ悟りきれないものであり，実績のある山中氏であるからこそ真実の重みを持つものであるだろう。貴重な考察であり提言であると考える。

小杉裕子氏は　主に地元愛知にそのエリアを限定し，先行研究や学生へのアンケート調査，またその分析と考察を行っている。それらの活動から，新たな発見につながると思われるものも多く包含していることが読み取れる。その中で愛知県教育委員会が昭和54年-55年度に実施した民謡調査の，県内における民謡の分類や地域別などにまとめた報告書について紹介している。「一かけ二かけ」にも触れ，能登半島のものと比較検討している。筆者の「仕事唄など様々な唄が子守唄としても歌われたのではないか」との仮説は、能登半島での聞き取り調査が原点である。その意味でも、小杉氏の研究は非常に意義あるものとなっている。

髙垣展代氏は　「子守唄」は「わらべうた」であるのかどうか、その分類について採りあげ、そこからこどもと唄との関わりについて多面的に考察している。その中には教育現場における実践活動から、こどもの実態を把握した上での考察が含まれる。また音・言葉・身体など、こどもの活動をトータルに捉え、こどもの「うた」の活動は未分化なトータルな活動であることを述べている。さらに氏の教育活動から、自身の即興的なふしづくりの実践についても記述し、「新しい歌の発掘」を含む本研究課題に迫っている意義は大きい。

小林田鶴子氏は　髙垣氏と同様、子守唄の分類から考察を始めている。しかしながら「子守歌は地域々々によってその歌い方が変わっていると述べたが、実は、その家その家、いや、その子その子一人ひとりに1曲ずつあるという風に考えることができるのではないであろうか」と独自の考察を展開している。これは「同じ唄でも地域によって節も言葉(歌詞)も少しずつ違っている」という、伝承わらべうた(子守唄やかぞえうた、手まり唄等)の実態を側面的に表したものでもあり、またそれらを総括したものとも考えられる。さらに千葉県八千代市の『音の民俗誌』や平凡社『教育の書2』の「子守歌」について述べ、教育的観点からの子守唄等歴史的なアプローチは非常に興味ある考察になっている。

吉村治広氏は　わらべうた等の「あそびうた」を音楽科教育の観点から捉え，音楽教育における教材性や有用性から考察している。氏によれば，音楽教育においてもそれらを取り込んだ実践研究は現在においてトレンドになっているという。永年の氏の研究課題であるポピュラー音楽とともに，異なった側面からの研究は意味深いものである。